



利根山光人

Toneyama Kojin

記念美術館通信

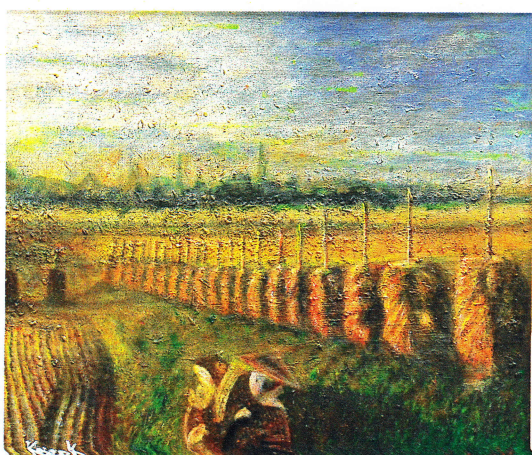
Memorial Art Museum News Letter

第87号 平成27年8月1日

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

『遺したい北上の風景画』



くつろぎ

豊作を喜び収穫に汗を流し、ちょっと一休み。
くつろいでいる姑嫁の美しい心暖まる景色である。
もしかして、北上、日本、世界の命を守る、つなぐ
「かぎ」をにぎっているのは貴女かも知れない。
くつろぎをもつことは、心安らぎ平和になると思う。
地球もくつろぎたいだろうなあ。

菊池 慶三さん

(利根山光人記念美術館光の会)

ー「遺したい北上の風景画」募集ー

応募希望の方は、北上市まちづくり部生涯学習
文化課 (0197-72-8304) までお問合せください。

「美術館の楽しさ」 その5

西側の壁面は200号の大作「日輪」と「集」が並び立つ。「日輪」は朱色が画面を被う。ササラが林立しその上に日輪が輝く。鹿頭は激しく上下左右に躍動し熱気が熱風となり地底から激しく吹き上がる。

「集」はインジゴの暗い青で塗り込められている。白く光るササラが乱舞し青い空間を切り裂く。暗闇には異形の鹿頭が幾重にもこちらを見て居る。郷土芸能を見て、興奮冷めやらぬ内に北上のアトリエで一気に描き上げた作品だろうか。思いが先走り、描くことがまどろっこしく感じながら描き上げた作品だろうか。荒々しい、激しい急遣いが感じられる。

高木 俊士

(利根山光人記念美術館専任研究員)



高木
俊士
画

メキシコのお土産

〈利根山光人画伯のエピソード〉

今年も38回目のアルテトネヤマグループ展を無事に終えることができました。毎年のグループ展とクリスマス会。数年毎に開催されたアトリエを使用しての利根山画伯の展覧会。

そこで行われるレセプション。「利根山は人が集まって来るのが好きだった。」と彌恵子夫人は話されている。会場での画伯は気遣いなのか食物や飲物をほとんど口にされていないようでした。招待客が帰られた後、「〇〇さんは？〇〇氏は？と相手をしていると食べたり飲んだりはなかなかできない。(少し間をおいて) サーモンだけは。」と話され、スモークサーモンがきつとお好きなのだろうと思いました。



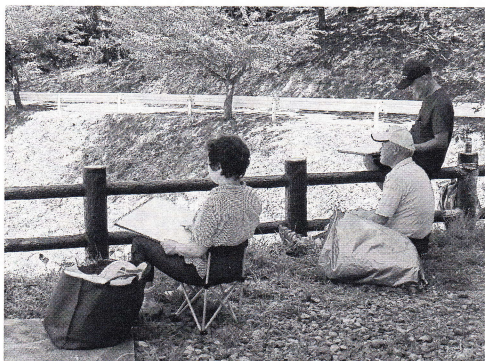
彌恵子夫人・パーティーにて

トウハラ ヒトシ 東原 均 (画家 アルテ・トネヤマ講師)

利根山光人画伯、彌恵子夫人が主催するARTETONEYAMA音楽絵画研究所に1984年より参加。現在に至る。

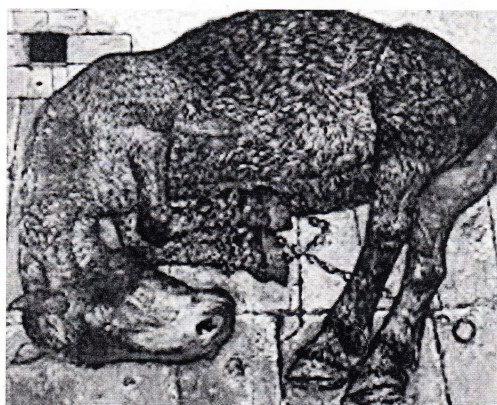
絵画教室(移動教室) 受講生の皆さんから

- 毎回楽しみにして参加しています。絵を描く楽しみをおぼえたいと思っています。(及川 浩久)
- 若い時からやってみたかった事が出来てとても楽しいですし、全てが新鮮です。(小原 雅子)
- 訪れたのは2回目です。絵画教室に参加中なので、じっくり説明をして戴きましたので、興味深く拝見できました。やはり肉声での説明の鑑賞は見る目が違って、楽しかったです。(小野寺寿雄)
- 恥ずかしながら初めて来館しました。50代に入り郷土色の強い物に魅かれるようになった時期だからこそ、利根山さんの描く力強い鹿踊りや鬼剣舞は懐かしく生命力を感じました。又、祭り、祈りという先生の説明に一層“命”を感じる事が出来ました。赤や黄、鮮やかな色合いはとぼしる命。子ども達や中高年に見てもらいたいものです。(菊地 和子)
- 素晴らしいの一言です。(栗澤 紀子)
- 集中して絵を描ける環境で、静物や風景画も新鮮で面白いです。
(昆 麻里奈)
- 小学校以来ですが、次第に回数が増えるにつれてうまくなっていくような気がします。(高橋 茂)
- 利根山さんも千田さんもフリーな感じが良い。絵は奥が深いことが少し理解した。(高橋 浩生)



＝美術館・展示会巡り＝

4. 「開拓の馬」への旅



死馬



馬(絶筆・未完)

どうしても見たい絵があるということは、しあわせなことである。目的地に到着するまでの期待感は車窓の北海道十勝の景色を見ながら高まっていった。戦後の開拓の村を走る鉄道の旅は長く、簡単にその美術館に到着させてはくれなかった。札幌から約2時間、根室本線の新得という駅からバスでさらにトントコゆられてやっと着いた^{かんだにつしょう}神田日勝美術館。

食い入るように見た画集の馬の毛並みは、一線一線ナイフでひっかいて描かれたものだろうか。矛盾するが、生き生きとした死馬のリアリティー。ほほえみさえ浮かべているかのような死せる「生命」と向き合う^{かんだにつしょう}神田日勝の視線のあったかさと厳しさ。

実物と対峙し、わずか十数センチの距離でベニヤ板の上の絵の具のひっかき傷を見ていることが奇蹟のようであり、めまいを覚えた。

抜いたばかりの親知らずの激痛を押さえる痛み止めを飲みながらの北海道鹿追町への旅は20年も前の話であるが今、尚印象深い。

32歳で夭折した開拓の村の農民画家、神田日勝^{かんだにつしょう}を追い求めた旅であった。

絶筆である半分の「馬」は現在、あまりにも有名である。

菊地 仁美

(第2回利根山光人記念大賞展ビエンナーレ・きたかみ大賞受賞)